吉田昌夫編

『地域研究入門
――世界の地域を理解するために――』

古今書院　2002年　ix＋250ページ

山口博一（やまぐち ひろいち）

本書は，編者が中部大学において「地域研究入門」という1年生向けの講義を受け持った経験をもとに，教科書として書かれたものである。全3部からなり，各部は「地域研究とは何か」，「世界の地域」，「グローバル化の現代における国際労働力移動と移民社会」と題されている。第Ⅰ部と第Ⅲ部はともに編者の執筆によるもので，前者は風土論，比較文明論などに触れながら「地域研究の鍵」としての民族を論ずる。また後者はドイツを参考にしながら日本における移民の状況を述べている。これは日本を考えるためということであろう。

吉田氏は「はしがき」でも「世界の中にある日本を考えるための入門書」として本書を位置付けており，これに対応して第Ⅱ部の最後の章は日本を扱ったものとなっている。日本は上記の講義で取り上げられる9つの大地域のひとつであり，このことは本書の特色のひとつをなしている。以下では，もっぱら本書の大部分を占める第Ⅱ部を取り上げることにする。

第Ⅱ部の15の章はそれぞれ別の執筆者によるものである。この構成は上記の講義で世界を15の地域に分けていることに見合っている。この15はさらに9つの大地域にくくられる。それぞれの章は15ページ前後で，内容は各執筆者に任されたものであるが，いずれの章も非常に読みやすい。読者がこの第Ⅱ部から世界各地について多くの知識や見方を得ることはまちがいない。

半面でそれぞれの章の中身にはばらつきがある。例えば各地域で何を主食としているかを扱っているのは中国，朝鮮半島，オセアニア，南アジア，熱帯アフリカ，ラテンアメリカの6章である。標準的な書き方は，その地域の名称の説明から始まって，自然・地形・歴史，人口・宗教・言語，政治と経済，国際関係，日本とのかかわりといったものであろう。これは南アジアの例だが，かなりの章は多かれ少なかれこのような節立てをしている。

いくつかの章に関して気が付いたことを記すと，オセアニアの章はポリネシア，ミクロネシア，メラネシアを中心とするところに特色がある。アフガニスタン，イラン，中央アジアなどに関する章はないが，ある程度まで南アジア，アラブ・イスラム世界，東ヨーロッパおよびロシアの章でカバーされている。東ヨーロッパおよびロシアの章は主にスラブ地域を対象としているが，ギリシア，コーカサス，バルト諸国，北欧にも触れている。全体を通じてイスラエルにもっと注目してもよかった。西ヨーロッパの章はパリの城壁の話で，それ自体は興味深いが本書の趣旨からは題名通りの西ヨーロッパの章が欲しかった。

それぞれの章は，ほかならぬその地域を勉強することの意味について何かメッセージを発しているであろうか。これは書き手がそれを意識するかどうかだけでなく，読者がどう受け取るかの問題でもある。朝鮮半島の場合には，それは「日本を映し出す鏡」という副題に示されている。東南アジア大陸部およびフィリピンの章では，ASEAN 10カ国はいまや「何事も戦争によらずに話し合いで解決しようとする合意」に達しているという部分をそう受け取ることができる。アラブ・イスラム世界の章ではムスリムとしての義務である五行に比較的スペースを割いているのがその意味であろう。

トルコの章は，ヴェールを脱いだ女性たち，ヴェールを被り直した女性たち，ヴェールを被り続ける女性たちの存在を指摘するなど，女性に焦点を合わせている。熱帯アフリカの章は，サハラ以南のアフリカの食料不足に関し，原因として農法の問題，輸出用作物への転換，および内戦を挙げる。南部アフリカの章は，黒人，白人，カラード，インド人を含む人種問題を挙げる。ラテンアメリカの章のメッセージは，おそらく先住民であろう。本書では全体を通して先住民に注意が払われているが，この章は他にもましてその現状に触れている。

（文教大学国際学部教授）